拙著『セオドア・ワッツ＝ダントン評伝――詩論・評論・書評概説と原文テキスト付』余滴――追加と修正

河　村　民　部

筆者は上記の拙著『セオドア・ワッツ＝ダントン評伝――詩論・評論・書評概説と原文テキスト付』を昨年2015年9月に英宝社から出版した。この評伝は、19世紀のイギリスの文豪、だが今や完全にと言っていいほど忘れられたセオドア・ワッツ＝ダントンの復活を目的として、彼の伝記と彼が生前書き残し、生前に出版したあるいは死後に出版された詩論・評論及び書評の主なものを選んで、その概説を書いたものである。その時筆者が主として参考にした書物は、拙著にも記したとおり、Thomas Hake & Compton-Rickett, *The Life & Letters of Theodore Watts-Dunton*（London: T.C. & E.C. Jack, Ltd., 1916）Vols.2（以下ヘイクの『伝記と書簡』と略記）、James Douglas, *Theodore Watts-Dunton: poet, novelist, critic.*（John Lane,1904, rpr. Haskell House Publishers, Ltd., 1973）（以下ダグラスの『ワッツ＝ダントン評伝』と略記）、Theodore Watts-Dunton, *Poetry and the Renascence of Wonder*（Herbert Jenkins Limited, 1916）（以下『詩論と不思議の復活』）、同著者の *Old Familiar Faces*（Herbert Jenkins Limited, 1916）（以下『懐かしい者の顔ぶれ』）、文芸誌としては『アシニーアム』（*Athenaeum*）と『ナインティーンス・センチュリー』（*The Nineteenth Century*）、百科事典としては『ブリタニカ百科事典』（*Encyclopaedia Britannica*, 9th Edition）と『チェンバーズ英文学百科事典』（*Chambers's Cyclopaedia of English Literature*, Vol.III, 1904）である。

この拙著では、上記の内容を纏めるのに全精力を傾倒していたので、セオドアに関するわが国での書誌を綿密に掘り起こす作業が十分にはできなかった。それにセオドアのそれまでの伝記――ヘイクの『伝記と書簡』及びダグラスの『ワッツ＝ダントン評伝』――では言及されていないで今も不明の重要な事柄、例えば、セオドアの妻のクレアラ（Clara）の生年月日や死亡年月日とか、どこの生まれで、死後どこに埋葬されたのかとか言う基本的事実、またセオドアの未刊小説の原稿の行方

や、セオドアの書いた或るソネット連作の初出掲載の雑誌ないしは書物、あるいはシェイクスピアのオックスフォード版ワールド・クラシックスへの序文の行方等々も、拙著の出版時点では不明のまま、やむを得ずに出版した。

出版してからもこれらの不明の事柄が心にかかり、拙著を読んでくださり少しでもセオドアに興味を抱いて下さった読者諸氏がおられれば、これの謎をひと時でも早く明らかにせねばならないと思い、片時も頭を休めることがなく今日まで来た。英語の諺に、“The wish is father to the thought.”というのがある。「願望は信仰のもと」というわけで、或ることを頻りに願っていると、それが信仰になり、その存在を信じ込むまでになるというわけである。

筆者の場合もそうで、セオドアに関する未知の事柄が少しでも明らかになればと希っていると、その一念が通じたのか、今年になってから、友人やインターネット情報等から一つ、また一つと謎が解明されていったのである。これは不思議というほかない。今は亡きセオドアがあの世から、彼の生まれ故郷のイギリスでも、忘れ去られていて、誰もやってくれないことを、東洋の小さな島国の、彼には本来縁もゆかりもない一読者・研究者が頻りに発掘しようと努力していることに共感の念を抱いてくれて、手を差し伸べてくれようとしているとしか思えないのである。

閑話休題。

以下、(A)「日本におけるセオドア・ワッツ＝ダントンに関する書誌一覧」、(B)「(A) の書誌について特に必要と思われるものの解説」、(C)「拙著に挙げた＜参考文献＞の追加・修正」、(D)「クレアラ・ワッツ＝ダントンの生年及び死亡年月日等」、(E)「セオドアの未刊小説の原稿の行方」、(F)「ソネット『三つのファウスト』についての解説」という順に整理して述べる。それぞれの項目が、相互に関連していることから、論述に重複が生じるが、ご寛恕願いたい。

(A)「日本におけるセオドア・ワッツ＝ダントンに関する書誌一覧」

これは筆者と同じヴィクトリア朝文化研究学会のメンバーで、目下この学会の副会長でもある筑波大学の山口惠里子教授が、ご自分の主たる研究対象のラファエル前派の画家・詩人の日本における書誌一覧を整備された時に、その一環としてお作りになったセオドアの書誌を、そういった検索の苦手な筆者に親切に提供してくだ

さったものに基づいたものであることを、最初にお断りしておく。その山口先生の書誌一覧に筆者が少し手を加え、日本語の書誌がローマ字表記されていたものを元の日本語名に変え、英語名が加えられていたものを省略した。また、山口書誌一覧（以下このように呼称）には挙げられていないもので、必要と思われるものは（＊）を付けて、筆者が追加した。

＜日本語訳＞

1. 栗原古城「海外詩壇　セオドオル・ワッツ・ダントン」（『明星』、明治41（1908）年、10月号）。簡単な伝記と詩“*Natura Benigna*”、“*Natura Maligna*”、“*The Rosy Scar*”、“*The Three Fausts*”、“*A Dream*”、“*The First Kiss*”を取り上げ、その訳を付し、簡単な解説をしたもの。詳しくは（B）参照。

2. 平田禿木訳・注釈付「ワッツ＝ダントン：海の瞑想」（“On Raxton Sands” from *Aylwin*, Part I, Ch.1 &2の途中まで）『英語青年』25.3-12（1911）

3. 平田喜一訳「ワッツ＝ダントン：バイロン卿評伝講義」（“Byron” from *Chambers's Cyclopaedia of English Literature*, Vol. III,1904）『英語青年』26.1-8 & 26.-11（1911-12）

4. 戸川秋骨訳『英國近代傑作集（上巻）エイルキン物語』（*Aylwin*）國民文庫刊行會（大正4年、1915）、再版（大正14、1925）解説付き。

5. 久野朔朗“Swinburne as a Man of Business”「事務家としてのスキンバーン」from Clara Watts-Dunton, *The Home Life of Swinburne*（A.M. Philpot, London, 1922）.『英語青年』1-4.（1926）

＜セオドア・ワッツ＝ダントンに関する章と論文あるいは書評＞

6.（＊）夏目漱石「小説『エイルキン』の批評」（『ほとゝぎす』明治32（1899））『漱石全集』（第13巻、90-108.岩波書店、1995）セオドアが*Chambers's Cyclopaedia of English Litearture* Vol.IIIの巻頭論文“Renascence of Wonder in English Literature”（1904）で強調しているイギリスロマン派の特徴である「不思議の復活」を、19世紀の合理主義精神に対置するものとして特に強調した。

7. 島田謹二「日本近代文学の一つの見方」（増田四郎編『西洋と日本――比較文

明史的考察』中央公論社、昭和 45（1970）所収、121-64）漱石の「趣味の遺伝」が小説 *Alywin* の影響を受けている点を指摘しているが、具体的にどこと特定して論じているわけではない。

8. 斉藤恵子「『趣味の遺伝』の世界」『比較文学研究』24. 80-109（東京大学、1973）上記 7. 島田謹二の示唆を受けて、これを詳細に論じている。

9. Homma, Kenshirô. "*The Phantom Shield* and *The Song of Evanescence* and Theodore Watts-Dunton's *Aylwin*," & "*The Grass Pillow* and Theodore Watts-Dunton's *Aylwin*," *Nenpó* [*Annual Report of the Research Centre of the Comparative Literature*, Tokushima Bunri Univ.] 1 (1985) (in English).

10. 松村昌家「漱石とラファエル前派――『草枕』におけるオフェリア像を中心に」『英語英文学』甲南大学文学部紀要、81（1992）セオドアとメレディスに言及。

11. 山口惠里子「ロセッティの裸体画にみる "Nature" ――ウォッツ・ダントンとの関係を踏まえて」（*The Round Table*, Vol.8, Keio University, March 1993）上記８．９．における斉藤恵子と本間賢史朗による本格的比較文学研究の対象としてのセオドア論に続く、D.G. ロセッティとセオドアとの芸術的感性の対比研究。

12.（＊）河村民部『エロスとアガペ　饗宴の比較文学――ヴィーナス・タンホイザー伝説から川端康成まで――』（英宝社、2014）第 2 章「D.G. ロセッティとワッツ＝ダントンの関係をめぐって」&　第 3 章「漱石と D.G. ロセッティ、ラスキンおよびブラッドン」

＜セオドア・ワッツ＝ダントンに関する書籍＞

13. 河村民部『セオドア・ワッツ＝ダントン評伝――詩論・評論・書評概説と原文テキスト付』（英宝社、2015）本格的な伝記とセオドアの詩論・評論及び書評の主なものの概説を付した我が国における初めての本格的評伝。

(B)「(A) の書誌について特に必要と思われるものの詳細な解説」

＜日本語訳＞

１．に関して：この訳詞のうちの一つ "A Dream" は、長編詩 *The Coming of Love* の一部をなす、XVII. The Promise Again Renewed に出てくる（The Dream

in the hut）の詩句（pp.77-78）である。残りの詩はすべて *The Coming of Love and Other Poems*（John Lane: The Bodley Head, 1898）所収の詩である。“The First Kiss” はこの詩集の中では、“Rhona's First Kiss” で、Natura Benigna Part II The Daughter of the Sunrise Ⅰのタイトルの詩（pp.179-82）である。初出は *The Athenaeum*（January to June, 1888）827で、“The Rosy Scar” は同詩集の “Prophetic Pictures at Venice” VI: “Prophecy of the Third Picture,” pp.205-206にあり、その初出は同じく *The Athenaeum*（July to December, 1883）814で、タイトル名は “Rosicrucian's Christmas Eve” である。“The Three Fausts” の初出はEleonore D'Esterre Keeling ed., *The Music of the Poets: A Musicians' Birthday Book*（London: Walter Scott, Ltd., 1889）であることが判明。したがって、『ファウスト』連作は、上記の本の出版時1889頃に書かれたものと思われる。筆者所有のその本は1897年で、第二版であるが、その324-25には、“The Three Fausts” という題で、I. Berlioz, II. Gounod, III. Schumannという小見出しで掲載されており、編者のEleonoreが本書の “Introduction” で特にセオドアが本書のためにこのソネット連作をしてくれたことに謝意を表明しているのが印象的である。このイントロが書かれた年代が1889年と明記されているから、この本の初版はおそらく1889年と思われる。この点に関する詳しい探索に経緯については、後程「クレアラ・ワッツ＝ダントン」の項で詳述する。尚、“Natura Benigna” の *The Coming of Love and Other Poems* への所収はpp.78-79、“Natura Maligna” はpp.75-76.

また同じく古城栗原元吉が同エッセイでタイトルのみに言及しているセオドアの詩『平原の麗姫』（“Damosel of the Plain”）及び『英國海峡雑咏』（“Sonnets from the Channel”）は、いずれも *The Athenaeum* に初出あり。

＜セオドア・ワッツ＝ダントンに関する章と論文あるいは書評＞

8. に関して：この論文は『エイルウィン』と「趣味の遺伝」の詳細な比較文学研究のみならず、漱石の他の初期の英国ものと呼ばれる作品に共通するテーマ――愛というものは遺伝すると言うこと――を包括する優れた論考である。特に「趣味の遺伝」に見られる戦死した男とその男の墓参りをして墓地の化け銀杏に化身する女の超自然的な愛の関係が、『エイルウィン』に見られるヘンリーとジプシーの女

性シンフィーとの結びつきをそのプロトタイプとして描かれていることを詳細にわたり論証していて、説得力のある論考となっている。

9. に関して：「幻影の盾」のウィリアムとクララは、『エイルウィン』のヘンリーとウィニフレッドをプロトタイプとしており、また赤着の衣を着て音楽を奏でる女は、『エイルウィン』のジプシー女のシンフィーがモデルであると言う。さらに、「薤露行」のエレーンとランスロットの関係およびギネヴィアとランスロットとの不義の関係とエレーンの死によるギネヴィアの改心が、『エイルウィン』におけるシンフィーの純粋無垢なヘンリーへの愛（wholeheartedness / sincerity）の関係のプロトタイプを提供していること、また『エイルウィン』とこれら漱石の両作品とは、「呪い」とそれからの解放、そして愛の成就の「予言」をめぐる小説である点でも共通していることを強調した論考であり、説得力がある。

11. に関して：これについては、筆者が『エロスとアガペ　饗宴の比較文学――ヴィーナス・タンホイザー伝説から川端康成まで――』（英宝社、2014）第２章「D.G. ロセッティとワッツ＝ダントンの関係をめぐって」で、追補としてこの論文を取り上げ、詳細に論じているのでそれを参照されたいが、論者はセオドアの自然と一体となりうるイギリス人特有の「自然観」をどうしても共有できないロセッティの絵画における救いのなさを特に強調している。

12. に関して：『エロスとアガペ　饗宴の比較文学――ヴィーナス・タンホイザー伝説から川端康成まで――』（英宝社、2014）　第２章「D.G. ロセッティとワッツ＝ダントンの関係をめぐって」では、ロセッティにとってセオドアの存在が如何にかけがえのないものであったかの強調と、具体的なセオドアの詩をロセッティが画を通してそれを表現しようとしたことの両者における密接な関係を論じている。また同書第３章「漱石と D.G. ロセッティ、ラスキンおよびブラッドン」では、第２章の延長として、セオドアの他に、ロセッティ、ラスキンおよび 19 世紀後半の煽情小説の大家エリザベス・ブラッドンと漱石の小説との比較文学論を展開している。特に彼らと漱石の「ドッペルゲンガー」をめぐる特質について論じている。

(C)「拙著『セオドア・ワッツ＝ダントン評伝――詩論・評論・書評概説と原文テキスト付』に挙げた＜参考文献＞の追加・修正」

＜追加＞

1. Watts-Dunton, Theodore. “The Three Fausts.” Eleonore D’Esterre-Keeling ed., *The Music of the Poets: A Musicians’ Birthday Book*. London: Walter Scott, Ltd., 2nd Edition, Completely Revised, 1897.

このセオドアのソネットの初出掲載書物を発見するに至った経過について、述べておく必要がある。(A) の「日本におけるセオドアに関する書誌」の項でも言及したが、セオドアの創作した詩は、大抵彼が編集を担当する『アシニーアム』誌の詩欄に掲載されているが、このソネット連作『三つのファウスト』だけは、何度この雑誌を探しても見つからず、秘書であったトマス・ヘイクも『伝記と書簡』の中では、この出典に関しては、何も言っていないので、インターネット検索を繰り返したが、まったく手掛かりがなく、今日まで過ぎた。だが、諦めるのは早いと思い、もう一度少し方法を変えて検索をしてみた。すると、カリフォルニア大学の図書館がディジタル化した上記の本にセオドアが、このソネットを書いているという文章が、眼に入った。そこで、筆者がつねに頼りにしている世界的古書検索マシーンの ABeBooks を利用して、検索をかけたら、初版はわからないが、第二版は 1897 年に出版されていることがわかった。そして大英図書館がその前年の 1896 年出版のものを所蔵していることが分かった。早速大英図書館に問い合わせたところ、初版かどうかはわからないが、確かに 1896 年版はあるとの返事であった。筆者はすでに ABeBooks に 1897 年版を注文していたので、それが到着するのを待って、イントロを見てみると、編者の Eleonore がこの本を編集した目的や依頼人のことを詳しく書いていて、その中に特にセオドアにはこのソネットをその本のために書いてくれたことへの感謝の念を述べ、最後にこの文を書いた日付を、1889 年 11 月と認めているのを発見した。これで、ヘイクの『伝記と書簡』でクレアラがセオドアを回想して述べていることが事実であることが判明したのである。つまり、セオドアの妻となる少女がセオドアに初めて会ったのは 16 歳の時で、その時には既にこのセオドアのソネットを読んでいたというからである。彼女の生まれた正確な生年月日は、この後で説明するが、16 歳というのは 1892 年に当たる。した

がって、初版がそれ以前に出版されていたとすれば、確かに彼女の目に触れたことになる。目下その初版を見つけようもないが、確かにその頃には出版されていて、クレアラはそれを読んでいたのである。長々と述べたが、一つの事実を確認するのは、このように、大変な労力が要るのである。以下のクレアラの生年月日や死亡年月日等の発見に関しても、同様に大変な労力が費やされたのである。

＜修正＞

1. Watts-Dunton, Theodore. Introduction to *Shakespeare*. World's Classics. Oxford.1910.→"A Note on The Special Features, Typographical and Other, of This Edition." *The Complete Works of William Shakespeare*. World's Classics Edition. ed. Edward Dowden. 9 vols. pub. Henry Frowde. Oxford University Press, 1910.

これに関しても、若干説明を加える必要がある。拙著『セオドア・ワッツ＝ダントン評伝――詩論・評論・書評概説と原文テキスト付』の伝記中の XV. シェイクスピアを扱ったところで、セオドアが視力のために、ワールド・クラシックス版の編集を放棄せざるを得なくなり、その事情をオックスフォード出版局の Frowde に手紙で知らせている件に言及したが（109）、Frowen と誤記をしているのをまず改めたい。正しくは Henry Frowde である。上記の９巻本はポケット・エディションで、そのうちの第１巻（1910）と第４、第５、第８、第９巻を Henry Frowde が扱い、出版年代は 1911 年となっており、それ以外の巻はすべて Humphry Milford が出版しており、出版年代も後者はすべて 1911 年となっている。拙著の中で引用したセオドアから Frowde に宛てた手紙では、この全集へのイントロダクションと『ヴェローナの紳士』論と『嵐』論はすでに仕上げてあるが、これらのエッセイを全集に使うか否かは、出版社にお任せすると述べている。残念乍らこれらのエッセイはいずれも使われず、申し訳程度に残ったセオドアの文章が、第１巻に掲載された"A Note on the special typographical features of this edition"で、Algernon Charles Swinburne の"A General Introduction"に続く、5 頁のものである。それには、このポケット版が特に戸外で読みたいと思う読者のために工夫された版であることが述べられている。セオドアはシェイクスピア

の作品こそは、この劇作家が愛した戸外の自然の中でこそ読まれるべきだという持論の持ち主であったからである。そのことについても、拙著の中で述べてある。この持論だけは、活かされたことになる。

2. Watts-Dunton, Theodore. "Dickens and Christmas." *Nineteenth Century*, 1907. → "Dickens and Father Christmas." *Nineteenth Century*, 1907.

ディケンズが亡くなった時、街中で出会った子どもが、「ではファーザー・クリスマスも亡くなったの？」と言った逸話の紹介から、如何にセオドアがディケンズを愛していたかを伝えるエッセイであるが、紙数の都合で、拙著には概説と原文の掲載を割愛した。ディケンズ愛好家には申し訳ないことである。ご入用の向きは、申し出てもらいたい。コピーを所持しているので、複製をお送りします。セオドアには、"Dickens Returns on Christmas Day" という素敵な詩があることも言い添えておく。初出は *Athenaeum*（July to Decmber,1890); 889 であるが、詩集 *The Coming of Love and Other Poems*（John Lane, 1898）にも収録されている。

3. Watts-Dunton, Theodore. *Vesprie Towers*（unpublished）. → *Vesprie Towers*. Smith, Elder & Co.,1916.

そんなはずはないと思い込んでいたセオドアの、*Aylwin* 以外の小説が、何と出版されていたのである。拙著にも記したが、*Aylwin* 以外にセオドアが書いた原稿の残っている小説は三冊ある。そしてそのうちの生前から出版の直前にまで行ったが、出版された形跡のない *Carniola* という題名の小説の行方を、筆者はずっと執拗に追っかけている。このことについては、後の（E）「セオドアの未刊小説の原稿の行方」で詳しくその追跡の経過を紹介する。ここでは、奇跡的に上記の *Vesprie Towers* が出版されているという事実に出くわしたことを、少し書いておきたい。筆者はそんなことはあるまいと思って、*Vesprie Towers* のことは、一応除外してかかっていた。それが新たに PC を購入する羽目になり、それに伴ってブリタニカ百科事典の新しい版も買い替える必要が生じたので、イギリスのブリタニカ出版社に問い合わせて、新版を 75％引きで購入した。それが送られてきて、インストールした際に、生年月日と死亡年月日の分からない妻のクレアラのことが何か書いてあるかもしれないと思い、改めて Clara Watts-Dunton の項を引いてみた。だが出てきたのは、彼女ではなくて、夫の Theodore Watts-Dunton の方であ

り、短い記事ではあるが、その中にセオドアが出版した *Aylwin* の他に、*Vesprie Towers*（1916）があると書かれた一文があった。これには魂消て、早速古書探索で *ABeBooks* に入力したら、初版が2冊だけ残っていることがわかった。勿論喜んで、そのうちの1冊をすぐに購入した。出版社はセオドアの親友の John　Lane, The Bodley Head ではなくて、上記のように、Smith, Elder & Co. からであり、出版年代はブリタニカの言うように、1916年、つまりセオドアが亡くなってから2年後であった。その初版には、しかし、誰の手によって出版に漕ぎつけたのか、一切何の記述も名前もなく、タダ小説の本体のみが印刷されている。こうしたことが行われていたのであれば、秘書のトマス・ヘイクも『伝記と書簡』の中で、何とか言ってくれていればよかったものをと、その不親切を残念がった。だが宝物はそっと手を付けずに隠しておくから、値打ちがあるというものであろう。筆者はこの宝物を目下独り占めにして、涎を流しながら、これの翻訳に日夜取り組んでいるのである。そのうちに読者諸氏に御目文字することになろう。考えてみれば、セオドアはブリタニカに乞われて、例の素晴らしい詩論“Poetry”を第9版に書いたのであったから、彼はとりわけブリタニカとは縁が深い関係にある。そこでちらっと *Vesprie Towers* の存在を、セオドアに関心のある読者に漏らしたのであろう。これは天の配剤であると、筆者は思っている。

(D)「クレアラ・ワッツ＝ダントンの生年及び死亡年月日等」

これについては、セオドアの秘書のトマス・ヘイクの『伝記と書簡』の中に、クレアラがヘイクに頼まれて書いた夫人の回想記「ウォルター・セオドア・ワッツ＝ダントン」があり、そこには夫人は自分とセオドアの年の差は40歳であり、彼女が16歳の時にウォルター――クレアラはワッツ＝ダントンのことをファーストネームのウォルターで呼んでいるので、ここでは、セオドアではなくてウォルターを使うことにする――と初めて会ったと証言していることは、これを信じた筆者が拙著の中でも引用している。そしてさらにクレアラは、二人が結婚式を挙げたのは、1905年11月29日、ウォルターが73歳の時であったという。これから推して、その時クレアラは33歳であったということになるから、彼女の生年月日は、逆算して、1872年9月14日と筆者は書いた。一方ウォルターの方の生年月日と死

亡年月日ははっきりしている。彼は1832年10月12日生まれで、亡くなったのは1914年6月6日である。

だが、拙著の出版後、ウォルターの書いたソネット「三つのファウスト」（“The Three Fausts”）をわが国でいち早く訳した人がいることを知った。それは上述の「日本におけるセオドア・ワッツ＝ダントン書誌」の中ですでにその名を挙げた古城栗原元吉である。その訳の掲載された『明星』（明治41）の記事を読んで、筆者はそのソネットがセオドアの詩集 *The Coming of Love and Other Poems* 所収であることは知っており、古城もそれから引用していることもわかったが、問題は、この詩集の出版が1898年であるという点であった。クレアラは、ウォルターとの最初の出会いの時には、すでに読んで知っていたと証言していることからすると、このソネットが書かれたのは＜1872年＋16歳＝1888年＞か、それ以前ということになる。それをどこでクレアラが読んだのかは彼女自身も、秘書のトマス・ヘイクも何ら言及していないので困ってしまい、筆者はいつもウォルターが自分の詩を載せるのは文芸雑誌『アシニーアム』の自分の編集する詩の欄しかないと見当をつけ、1888年以前のT. Wattsで載っている彼の詩を調べてみたが、ない。

今年に入って早々に、ロンドンのSotheby & Co.という競売会社がワッツ＝ダントン夫人の死に際して、夫の長年の住居であったThe Pinesに夫の死（1914）から保管してきた遺品を競売に付すについての予告と、その遺品のカタログを印刷出版したのをインターネット上で発見し、これのPDFファイルを入手した。そのカタログのタイトルは *Catalogue of artistic & literary property removed from The Pines, 11 Putney Hill — consequent on the death of Clara, Mrs. Watts-Dunton*（London: Kitchen & Barratt, 1939）である。それでクレアラが亡くなったのは前年の1838年であることを知った。

だが、何月何日亡くなったのか、どこに埋葬されたのかについては、依然として不明であった。熱心に知りたがっていると、天は味方をしてくれるものである。それから間もなく私は、ふとしたことから、これまたインターネット上で、ワッツ＝ダントン夫人の死亡記事を見つけたのである。それはイギリスの地方新聞 *Glasgow Herald* の1938年9月17日（土）の死亡欄であった。それによると、「夫人の死により、彼女と彼女の夫、そしてスウィンバーンの三人を繋いでいた最後の

リンクが壊れた。彼女の遺体は本日パトニー・ヴェイル（Putney Vale）にて火葬に付される予定である」とあった。それで新聞の日付から計算して、彼女の死亡年月日が1938年9月14日（水）であることが判明したのである。

喜ぶのはまだ早い。それから間もなく筆者は、アメリカのジャーナリストの女性が書いたクレアラの死後出版されたスウィンバーンとワッツ＝ダントンのパインズ邸での友情関係についての本の存在を知り、その本を購入して必要な個所を読んだ。著者はMollie Panter-Downesと言い、著書名は*At the Pines: Swinburne and Watts-Dunton in Putney*（1971）である。その中で筆者が注目した事実は、この著者がクレアラとセオドアの歳の差は44歳であったと書いていることである。クレアラ自身上記のように、二人の歳の差は40歳と書いていたし、上記の*Glasgow Herald*紙でもクレアラとセオドアが婚約したのはセオドアが73歳、クレアラが33歳の時であったと、二人の年の差を40歳としていた。筆者も上述のように、それに基づいて、クレアラの生年月日は1872年9月14日であると思い込んでいた。だが、もしモリー・パンター＝ダウンズが言うように44歳の差があるというのが事実であれば、話が違ってくる。心のどこかに、どちらが正しいのかについて不安を抱いていた筆者は、今年の4月になって、思い切って*Glasgow Herald*の言うクレアラの火葬場のパトニー・ヴェイルの墓地の火葬と埋葬記録がないかを調べてみることにした。

これも遠い日本にいて、本国のイギリスに出向いて調べることをしない無精者のすることであるが、インターネットの普及が拙著『セオドア・ワッツ＝ダントン評伝』出版にどれほど貢献してくれたかは、言い尽くせない。そして今度も、果せるかな、筆者はインターネット上で、クレアラ・ワッツ＝ダントンの火葬と埋葬記録に逢着したのである。それは“Wandsworth Borough Council Register of Cremations in the Wandsworth Municipal Cremation, Putney Vale”というもので、そのいわば過去帳なるものを入手するには、その記録を保持している所有者、ここではワンズワース地区議会に12ポンドを支払って、記載のページをダウンロードする必要があった。

その結果わかった事実は、クレアラの死は*Glasgow Harold*が死亡欄で述べているように、1838年9月14日であり、火葬日も同様に9月17日であった。そして

享年の欄には62歳と記されていた。すると、クレアラ自身の証言や *Glasgow Herald* の記事にある40歳の年の差というのは間違っていることになる。正確には彼女は1876年9月14日生れで、亡くなったのは、上記のとおり、1938年9月14日ということが判明したのである。

遺骨処理記録の項目が如何なるものかについても、判明した。それは誰が火葬の依頼をしたのか、その人の名前と住所、そして火葬署名した者の名前、灰の始末の仕方、火葬に要した時間とガスの量、骨壺への骨拾いとその儀式を執り行った牧師名など、極めて詳細に記載されている。火葬を依頼したのはCharles Harold Reich（住所は21 Christchurch Road Streatham Hill, SW2 ―ロンドンの南Lambeth地区）とあるから、クレアラの兄弟と思われる。

尚、クレアラの生誕の地は、この記録にはないが、*Glasgow Herald* の先の記事には、グラスゴーの近くのTynemouthという海沿いの町であると記載があった。タインマウスというと、そこはD.G.ロセッティが訪れた場所であり、また小説家のチャールズ・ディケンズも滞在した場所である。ロセッティがクレアラの生誕の地を訪ねていたというのは、後の彼とワッツ＝ダントンとの奇しき親交を思うとき、不思議な気がする。クレアラがどのようにして夫となるセオドアに初めて会って、途端にお互いに、伴侶はこの人を置いて他にはないと直感したかについては、拙著でもそのことを取り上げて書いたが、クレアラの両親ライヒ（Reich）夫妻がどのようにして北の港町タインマウスを離れて、ロンドンに住まうようになったのかについては、目下不明である。このことについても、実地調査をしなければならないとは思っているが、何しろ寄る年波と、年金暮らしの金欠病で、思うに任せない。

だが、どうして知りたいという一念があれば、いつかはきっと秘密が明かされる時が来ると、固く信じている。

さて、叙述を宙吊りにしているセオドアのソネット「三つのファウスト」が掲載された雑誌であるが、このような事実の変更を突き付けられてみると、クレアラがウォルターと最初に出会ったのは、1888年ではなくて、その4年後の1892年であったのであり、そうなると必然的に筆者も1892年より少し前あたりをソネット創作と掲載の年として、『アシニーアム』に当たってみる必要が生じた。だが、こ

れも空振りに終わった。ではセオドアは一体どこにこのソネットを掲載したのか、皆目わからなくなった。

だが、『アシニーアム』という雑誌ではないとすると、ひょっとして雑誌ではなくて書物かもしれないという思いがふと沸いた。そしてまたインターネットを駆使して、忍耐強く探索を再開していると、「追加・修正参考文献」の項にも記したが、カリフォルニア大学の図書館がディジタル化した書籍の中に、セオドア・ワッツ＝ダントンの名と「三つのファウスト」のソネットへの言及があったのである。それは Eleonore D'Esterre-Keeling ed.,*The Music of the Poets: A Musicians' Birthday Book*（London: Walter Scott）であった。その書籍の名をお馴染みの古書店 ABeBooks に入力して検索をかけた結果、第二版が存在することが判明し、大英図書館に 1896 年があることも判明した。筆者は 1897 年出版の第二版を早速注文する傍ら、大英図書館に依頼して、所有の 1896 年版が初版かどうかを調査してもらった。返事はそれ以前のものは見つからないので、それが初版かどうかはわからないという返事であった。それで筆者は注文の第二版の実物が来るのを待って、調べてみると、編者の Eleonore　D'Esterre-Keeling が、その「イントロダクション」にこの本への寄稿を特にお願いして大変お世話になった人の名として、セオドア・ワッツ＝ダントンを挙げ、ソネット「三つのファウスト」の題名も記していることが判明した。そして彼女がそのイントロの最後に記している年代が、1888 年だったのである。これでこの本の初版は、1888 年ないしはその翌年 1889 年であることが濃厚になった。

こうして、クレアラがウォルターに初めて会った時、すなわち 1892 年には、すでに彼女はこの本でウォルターのソネットを読むことができていたのであり、彼女の証言は間違ってはいなかったのである。彼女をセオドアに紹介したのは彼女の母親であったが、その母親が音楽の仕事をしていたことは、娘の証言にもある。するとクレアラは母からこの A ４版の重たい本を読むように奨められたのではないかと推測できる。それはこの本が題名の通り、音楽家の誕生日に合わせて、詩人がその音楽家の創作した曲を元に詩を書いたものを一年の月日順に並べて、音楽家をそれぞれ祝うという趣向のものであったからである。

以下に「補遺」として新たに発見した事実を３頁にわたって挿入する。

補遺

筆者はこの春以上のような報告書を書いた。それから暑い夏が来た。その間筆者はセオドアが残していた小説 *Vesprie Towers*（1916）の翻訳に精を出していた。これがようやく完成したので、残る問題のクレアラの両親をめぐっての探求を再開した。四苦八苦の末、インターネットの検索エンジン“findmypast”を通じて解明できたことを次に記す。これはクレアラに関する重要な記録であり、初めて世に問うものである。

上記検索エンジンに自分のアイデンティティを登録して、クレアラのプライバシーに迫った。検索は主として1871年、1881年、1891年、1901年のイギリス国勢調査に基づいたものである。それによると、1871年にはクレアラの両親は既に結婚していた（結婚は1865年）ことが判明。父親の名前はGustav A. Reichで生年は1843年、誕生地はGermany、この国勢調査の時、彼は25歳であった。この時の記載では、“foreign merchant”とあり、外国商人であり、ロシアから移住してきたことになっている。クレアラの母は名をJane A. Reich（元の姓Wright）といい、夫のグスタフと同じ25歳であった。この時点では二人に間に子どもが二人あった。長女はElizabethといい、この時5歳（1866年生まれ）で、もう一人は生まれたばかりの息子George F.（1871年生まれ）がいて、二人の生誕地は、両親の居住地のNewcastle-upon-Tyne、Tynemouth, Northumberlandであった。この子どもらの母の元の姓は、Wrightであることも判明した。

10年後の1881年の国勢調査では、一家の住居は、2, Newcastle Terrace, Tynemouthとなっていて、前の国勢調査の時にいた二人の子どもは、名前が見えない。恐らく亡くなったものと思われる。それに代わって、三人子どもができていて、長男がCharles H(arold) Reichで、この時8歳、次男はMax W. Reichといい、5歳で、二人とも「生徒」(Scholar）と記されている。そして愈々我らがクレアラ・ジェーンの登場である。クレアラはこの時4歳で1877年の誕生という記載になっている。だが、前述のように、クレアラの死亡記録からすると、もう一年早い1876年の方が正しいのではと思われるので、筆者としては、前年説を取りたい。この時には父のグスタフの貿易商としての羽振りもよかったのか、奉公人を3人も家に置いていたことが分かる。

次の 1891 年の国勢調査では、クレアラは 14 歳で、Robena Thomson の経営する寄宿舎にいた。そこはロンドンの St Stephen Road, Paddington にあった。この国勢調査では、クレアラは 1878 年誕生となっていて、年齢が 13 歳となっている、明らかに誤記。ここには 72 歳の未亡人で戸主の Robena A. Thomson の他に、37 歳で独身の娘 Robena A.E. がいて、“School Mistress”とあるから、実質上は彼女が主として教育を担当していたと思われる。次に、音楽の先生で、既婚者の 35 歳の Sofia Metcalfe という次女がいるが、他に三女の Georgina（34 歳、独身）と、四女の Ada O.（30 歳、独身）がいて、それぞれ “Governess”をやっていた。もう一人 Amelia Pereoux という 39 歳の“Governess”がいた。生徒はクレアラを入れて 4 人（内一人はフランス人の少女）が寄宿生として登録されている。また、父のグスタフはこの時点までに既にイギリスに帰化していた記載がある。この時、クレアラの両親がロンドンへ既に移住していたか否かは不明。

だが、次回の 1901 年の国勢調査では、父（58 歳）、母（ここでは 1 年歳下の 57 歳と記載）、そしてすぐ上の兄 Max（25 歳で、商売人の書記をしている、親の跡継ぎである）とクレアラ（24 歳と記載）は、一家 4 人で、ロンドンの Canada Lodge, Marlboro Road, Putney, Wandsworth に居住している。1881 年の時点でクレアラは 14 歳であり、寄宿生であったが、その 2 年後の 16 歳には既に両親と一緒にロンドンに暮らしていたことは、高校の寄宿学校に通っていて、その時に母に連れられて、同じく Putney Hill にいたセオドアに逢いに来たというワッツ＝ダントンの秘書トマス・ヘイクによる伝記の記述が証明している。

そうして 1905 年の 12 月には長年の交友に終止符を打ち、クレアラとセオドアは目出度く結婚したのであった。クレアラの母は 1909 年、67 歳で死亡、父は 1923 年、80 歳で死亡している。尚、クレアラが亡くなった時、Putney Vale の火葬の依頼をした人は、Charles Harold Reich であったが、クレアラの 4 歳年上の長兄であることも、これで判明した。

さらに、セオドア自身の家族に纏わる年代についても、この場所を借りて追加修正しておきたい。セオドア自身の誕生は、すでに述べたが、ある年の国勢調査では、1833 年とも 34 年とも記録されたのがある。1,2 年の誤差は如何ともし難いので、これまで通り、1832 年で通す。またセオドアの父 John King Watts の誕生につい

ても、1808年と1809年の両方の記録があり、母のSusannahの誕生も1805年と1807年の両方の記録がある。父親が25歳の時、母親が26歳乃至は29歳の時の子どもがセオドアだということになる。父Johnの死は1884年、母Susannahの死は1881年で、いずれも76歳であったことは、確定している。

以上、拙著の不備を補うものとして、記録しておく。（Sept.2, 2016）

(E)「セオドアの未刊小説の原稿の行方」

さて、筆者はこれまでセオドアの未刊の小説原稿をめぐって、思わぬ発見をして驚いた例として、出版されているとは予期していなかった *Vesprie Towers*（1916）が、Smith, Elder & Co.から出版されていることを偶然ブリタニカの記事で知ったことは、すでに述べた。あと2冊の小説の原稿が残っていることになる。一つはBenjamin Disraeliの小説 *Lathair*（1870）を読んで、セオドアが勢い込んでそれを元にして書いた小説 *Balmoral: a Pendant to Lothair* と、同じ頃に書きながら20年間も推敲を繰り返し、死の直前には出版も予定していたもう一つの小説 *Carniola* がある。

名作 *Aylwin* を書き始めた頃（1870）、セオドアは当時の人気小説家F.W. Robinsonと知り合い、彼に書き始めの小説 *Aylwin* を見せたところ、素晴らしいと絶賛され、すぐに出版をするように言われたが、例の癖で、セオドアはこれを断り、その次には別の方の小説があるからと言って、それをまたロビンソンに読んで貰った。それが *Balmoral: a Pendant to Lothair* である。ロビンソンはこれも読んで、絶賛し、今すぐ出版すれば、君は大人気を博す小説家になること間違いないと言われた。それでもセオドアは躊躇い、結局、この出版は見送られることになった。筆者はこの原稿を入手していないので何とも言えないが、ディズレイリーの『ロタール』を読んだ限りでは、その小説は当時のイギリスにおけるアングリカンとカトリックが或る貴族の大御曹司ロタールをめぐって、自分の教会に引き入れんとして巻き起こす一大宗教論争が主題であり、これに絶世の美女Theodoraがイタリア独立の女闘士として絡み、これに魅了されていく若者ロタールの波乱の人生が描かれている。これを元に「付け足した」物語というのであるから、おそらく大変面白いものに仕上がっていたのではないかと推測しうる。

さて、それはさて置き、筆者が未だに熱心にその足跡を追い求めているのは、もう一つの未刊小説 *Carniola* の原稿の行方である。拙著出版の時からこれを探し始めていた。その探索の結果はこうである。まず、アメリカの Rutgers 大学にセオドアの書簡の大きなコレクションがあることが判明したので、近畿大学の畏友の Richard　Kelly 氏が親密にしているこの大学の図書館に頼んで、その膨大な手紙のコレクションの中から、セオドアが *Carniola* に関して言及している手紙を探し出したもののコピーを撮って添付で送ってもらうことにした。その結果わかったことは、この小説の校正がセオドアの死の直前まで行われていたことである。出版は間近に迫っていた。そしてその出版社は、秘書のトマス・ヘイクの『伝記と書簡』によれば、Harper and Brothers からであったという。

そこで筆者は出版社ハーパーに問い合わせのメールを書いた。とはいっても、今のハーパーは Harper Collins という大会社に吸収されており、今から 100 年も前のことなど、おそらくわからないのではと思っていたが、案の定いくら待っても返事はなしのつぶてであった。仕方がないので、イギリスでもセオドア関係の資料を持っている Birmingham 大学のワッツ＝ダントンコレクションを検索してみたが、書簡類以外に、小説のマニュスクリプト類はないことが判明した。それではと思い、今度はイギリスの National Archieves での検索を経由して、大英図書館に直接問い合わせたが、結局小説のマニュスクリプトは蒐集していないと言われた。

そうこうしているうちに、畏友のケリー氏が、メールでは埒が明かないので、ラトガーズ大学の図書館に直接訊ねてみると言ってくれ、しばらくして彼は、或る新聞の記事を添付で送って来てくれた。それはニュージランドの新聞 *Aukland Star*, Volume XLVIII, Issue 239, 6 October 1917, Page 17 の“Literary”欄で、亡きセオドア・ワッツ＝ダントンが残した小説“Carniola”を John Lane 社がこの秋の初めに出版するために目下印刷中である、という画期的な記事であり、筆者を仰天させた。だが、残念なことに、John Lane からは予定の出版時になっても、そのあとでも、どうしたことか、*Carniola* は印刷されて姿を見せたのではなかった。折角ここまで追い詰めたのに、またしても実物を取り逃がしてしまった。残念至極である。

だが泣き言を言っていても探索は進まない。筆者は原稿の行方をあくまでも見つ

かるまで追うことにした。それで、次はアメリカのオースティン・キャンパスのテキサス大学のHarry Ransom Centerに John Lane collectionの在ることを知り、セオドアが出版を契約していたHarper and Brothersから John Lane に変更になったことがわかったので、今度こそきっと捕まえられると確信して、John Lane collectionにメールを書いた。親切な返事が来て、残念ながら、ここにもJohn Laneの商取引上の手紙類だけで、小説の原稿はないとのことであった。

万事休す。目下畏友のケリー氏がよく利用するBloomsbury出版社のディレクターから直接John Lane, The Bodley Headに、何か当時の記録が残っていないか、またニュージランドの新聞にあるように印刷にまでかかったものがなぜ中止されたのか――中止されたとしか思えない――その辺の事情を、尋ねてもらうことにした。その返事がもうそろそろ届く頃である。

どうなることか、死力を尽くして探索中である。

(F)「ソネット『三つのファウスト』についての解説」

では最後に、すでに（A)「書誌」の所でも、また（C)「＜参考文献＞への追加・修正と所でも、また（D)「クレアラ・ワッツ＝ダントン」の所でも、すでに言及した、セオドアのソネット連作「三つのファウスト」について、初出の発見に至るまでをクレアラの生年月日や死亡年月日との関係で詳しく述べた。ここではそうした事実は省き、セオドアが実際にこの「三つのソネット」において、それぞれベルリオーズ、グノー、シューマンの作品を見たり聴いたりして、それをどのように感じたのか、そしてそれがどのように詩を通して言語表現されているのかについて、少し解説をしておきたい。

第一「地獄の調べ」

西欧音楽にはゲーテの『ファウスト』に基づき、その英知を集結させた三つの楽曲、ベルリオーズの『ファウストの劫罰』、グノーの『ファウスト』、そしてシューマンの『ゲーテのファウストからの情景』があるが、それを聴いたセオドア・ワッツ＝ダントンがそれらを合わせて三つの連作ソネットを書いた。その一つが「地獄の調べ」（The Music of Hell）である。これは他の二つの連作「地上の音楽」（The

Music of Earth）および「天堂の音楽」（The Music of Heaven）同様に、Elenore D'Esterre Keeling, ed., *The Music of the Poets: A Musicians' Birthday Book*（London: Walter Scott, Ltd., c.1889）のために書かれたが、後には彼の唯一の詩集 *The Coming of Love and Other Poems*（John Lane, 1898）に収録されたことは、すでに述べたとおりである。ベルリオーズの曲およびグノーの歌劇は、ゲーテの『ファウスト』の第一部を元に、ストーリーの展開に従って制作されたものであり、シューマンに至って、ゲーテの『ファウスト』の第一部と第二部が集約されることになるが、シューマンに関するワッツ＝ダントンのソネットのところで述べるが、シューマンは、ゲーテの『ファウスト』の原作に描かれている順序に従って曲を作っているのではなくて、その第一部と第二部から彼の音楽に相応しい情景を採り来たって、シューマンの第二部でも、ゲーテの第一部の自然の情景などを取り入れるなどして、全体の構想を考慮したうえでの、情景の配置を行っている点が特徴的であり、それが成功していることを、最初に述べておきたい。

さて、わが国ではこの三連作のソネットをいち早く江湖に知らしめたのは、古城栗原元吉（1882-1969）で、明治 41 年（1908）の『明星』10 月号の「海外詩壇」においてであった。栗原元吉は号を古城と称し、東京高等師範の付属中学で英文学者の平田禿木の教えを受け、東京帝国大学文科大学英文科では上田敏および夏目漱石の薫陶を受けた。第一高等学校の学生であるときから、新詩社の雑誌『明星』にワッツ＝ダントンの経歴と詩を紹介するのみならず、他のイギリスの詩人、例えばジョージ・メレディス（George Meredith）の『モダーン・ラヴ』なども紹介した早熟の青年であった。彼が教鞭を執った立正大学の教え子の英文学者鏡味國彦がこの偉大なる先輩英文学者の伝記『古城栗原元吉の足跡――漱石・敏・啄木、及び英国を中心とした西洋の作家との関連において――』（文化書房博文社、1993）を書いている。

さて、話は元に戻るが、上記『明星』で古城は、音楽を詩によって表現するというかつてない斬新な試みを絶讃し、我が国で初めてこの三部作の翻訳も試みた。その訳は明治期とはいえ、よく読み込まれた、過ちのないもので、今でも立派に通用する名訳になっている。

以下にその栗原元吉が『明星』に紹介したワッツ＝ダントンのファウストのソ

ネット連作の原文と彼の訳をまず引用する。原文はミス・タイピングやミス・スペリングが少なからずあるので、これを古城が引用した詩集 *The Coming of Love and Other Poems*（John Lane, 1898）を元に修正したものを掲載する。

The Three Fausts

I—The Music of Hell

I had a dream of wizard harps of hell
Beating through starry worlds a pulse of pain
That held them shuddering in a fiery spell,
Yea, spite of all their songs—a fell refrain
Which, leaping from some red orchestral sun,
Through constellations and through eyeless space
Sought some pure core of bale, and finding one
(An orb whose shadows from some comic mime,
Incarnate visions mouthing hopes and fears
That Fate was playing to the Fiend of Time),
Died in a laugh 'mid oceanic tears:
"Berlioz," I said, "thy strong hand make me weep,
That God did ever wake a world from sleep."

フハウスト三曲

一、冥府の音楽

我れは夢む、冥府(よみ)の魔の立琴を、
恐ろしき蠱(まじ)の術に人をして戦(をの、)かしむる
痛苦の脈搏、星宿の世界を通して波動す。
其一切の美しき歌に似ず——荒蓼(こうりょう)の節奏
赤きオオケストラ太陽より發し、
満点の星座と無邊際の空間を過(よぎ)りて
害悪の中核たる一の世界を求む、かくて遂に其適處を發見し得て

其天體には自からの陰影宛らに其面たゆらぎ、
恰も一場の滑稽狂言に於ける悲劇の影の如く、
さては又『運命の神』と『時の妖魔』との戯れより生ずる
希望と恐怖とを誇張したる具體的の幻覺の如し。）
涙の海原の中に笑ひつゝ消え失す。
我は曰ひぬ、『ベルリオよ、汝が強き樂(がく)の手は我をして泣かしむ、
そは神の曾て此世の眠を呼び醒ましたる其の如に。』

II—The Music of Earth

I had a dream of golden harps of earth:
And when they shook the web of human life,
The warp of sorrow and the weft of mirth,
Divinely trembling in a blissful strife,
Seemed answering in a dream that master-song
Which built the world and lit the holy skies.
Oh, then my listening soul waxed great and strong
Till my flesh trembled at her high replies !
But when the web seemed answering lower strings
Which hymn the temple at the god's expense,
And bid the soul fly low on fleshy wings
To gather dews—rich honey-dews of sense,
"Gounod," I said, "I love that siren-breath,
Though with it chimes the throbbing heart of Death."

二、地上の音楽

我は夢む、地上の黄金の立琴を、
彼等一度人生の蛛網を震はさば
悲しみの經(たていと)と歓楽の緯(よこいと)と、
幸(さち)ある亂調の音に神々しくも打慄へて、

世界を創建しまた聖なる天空を輝かす巨匠の歌と
夢中に相應するが如く覺ふ。
その音に聞き惚れたる我魂は刹那に強大となり、
我肉は樂(がく)の高調につれてわなゝく、
されど其賤しき絃(いと)の音さながら
神を褻(けが)して御堂(みだう)を讃むる祝(ほ)ぎ歌の如く響き
肉慾の翼に低く飛びて
官能の豊かなる甘き露貪るべく我魂を誘ふ時
我は曰ひぬ、『グウノオよ、我れは汝が妖姫の如き吐息を慕ふ、
よしやその音の『死』の波打てる心臓の響きには通ふも』と。

III—The Music of Heaven

I had a dream of azure harps of heaven
Beating through starry worlds a pulse of joy,
Quickening the light with Love's electric leaven,
Quelling death's hand, uplifted to destroy,
Building the rainbow there with tears of man
High over hell, bright over Night's abysses,
The arc of sorrow in a smiling span
Of tears of many a Gretchen's towering sorrow,
And many a soul fainting for death of kin,
And many a soul that hath but night for morrow,
And many a soul that hath no day but sin;
"Schumann," I said, "thine is a wondrous story
Of tears so bright they dim the seraphs' glory."

三、 天堂の音楽

我は夢む、天堂の青藍の立琴を。
そは星宿の界(さかひ)を通じて歡楽の鼓動を響かし、

電氣の如き力ある『愛』の酵母もて光明を鼓舞せしめ、
破壊すべく擧げられたる『死』の手を支へ、
幽冥の上(かみ)、『夜』の深淵の上にいや高く、
此世に數多き愛人の死の接吻(キス)や
數多きグレツチエンが積もる愁や、
血族の凶荒を悼む人々、
朝(あした)を有せずして夜のみを有(も)てる人々、
罪業の日の外に何物も有(も)たぬ人々、
之等の人々の涙を集めて
微笑(ほゝゑみ)の徑間に悲しみの半圓(アァチ)を架す。
われは曰ひぬ、『シュウマンよ、汝が樂の音は、
セラフの榮光をも曇らすべき輝ける涙の不思議な物語なり』と。

古城のベルリオーズに関する言及はこのようになっている――「ベルリオが錯綜せる樂風は極めて驚くべき技巧を以て其詩句の開展巻舒せる節奏中に攝取せられ、大宇宙の瀰蔓せる星宿の分野悉く讀者の眼前に展けて、其中心星座より發する『痛苦の脈搏』は、あらゆる日月星辰の全系統を過り、無邊際の空間を通じて、始めて此地上に於いて其故郷を見出したるの趣ありとなせり。」

これは詩そのものの流れを大まかに述べてはいるが、ベルリオーズがネルヴァルの仏訳『ファウスト』を媒体に音で表現しようとした意味の詳しい解釈にはなってはいない。ワッツ＝ダントンがその音楽を聴いて、彼の感性で文字に表現したものを、解釈せよというのが、本来、問題であるのかもしれない。だが、文字に表現された以上、読む者に理解できる意味の伝達がなされる必要がある。でなければ、文字表現に転換する必要はない。

では、ワッツ＝ダントンの詩句はベルリオーズの音楽をどのように解釈して、それを文字に表現したのであろうか。まず題名からして「地獄の調べ」とあるから、最初の詩句が「地獄の悪魔」のハープによる『痛苦の脈搏』であることは不思議ではない。それが歌でありながら、『荒蓼の節奏』である所がミソである。ベルリオーズは『ファウスト』の第一部を対象として、ファウストによって愛された無垢

の乙女マルゲリーテが母親殺しと嬰児殺しの廉で捕えられ獄中で死に至るのを嘆くファウストの絶望と、そのように仕掛けてファウストを地獄堕ちさせて、己の望み通り、ファウストを我が物としたメフィストフェレスの悪の勝利のコントラストを音楽でドラマ化したわけである。

そのファウストの絶望とメフィストの勝利の雄たけびが、灼熱の太陽より発して星々の間を通り、盲目の宇宙空間をよぎってこの地球という星に到達したとセオドアは言う。この歌の宇宙空間の旅は、恐らくベルリオーズの音楽がファウストの最初の何を見ても聞いても無感動な「倦怠」状態から、メフィストの魔力により、乙女のマルガリーテの愛に目覚め、それを成就する、そのはじめて知った情熱の旅のプロセスを、このように表現しているものと思われる。

ファウストは己の恋が成就したからには、享楽の絶頂にあるわけで、したがってその歌も享楽の歌でなければならない。だが、その歌の中には「苦痛の調べ」、栗原流に言えば、『痛苦の脈搏』があるのだ。なぜなら、その歌が到達したこの地球という星は、「時」という滅びが支配する世界であり、そこには『運命の神』と『時の妖魔』がいて、これが希望と恐怖を誇張して幻覚を見させるのであるから、その星の住人である人間は「悲劇の影」を免れることはない。

であるから、人間の『痛苦の脈搏』と「残忍な調べ」は、「笑いの内に」「大洋の涙」の中に没して、死に絶えるのである。「大洋の涙」はマルガリーテを死に至らせたことへのファウストの絶望の涙であり、「笑いの内に」の「笑い」とは、ファウストをこのようにして地獄に落したことへのメフィストの勝利の笑いであろう。このようにして一時の良心の呵責も、哄笑のうちに沈み、消えていくというのである。

ベルリオーズに「汝が強き樂の手は我をして泣かしむ」（古城）といい、それは「神の曾て此世の眠を呼び醒したる其の如に」（古城）というのは、「時」と「運命」に支配された滅ぶべき人間の宿命を神が人に自覚させたからだというのである。だから、我々は、我々と同様の存在でしか、結局は、ないファウストに対して、人類共通の宿命を、嘆かないではいられないのである。

詩人ワッツ＝ダントンのベルリオーズの音楽への共感は、この滅ぶべき人間の宿命をドラマティックに歌い、感動を呼び覚ましたことにある。

さらに言えば、メフィストが地獄から昇って来て、地球を目指し、そこにファウストという人間を見出して、これを罪に陥れんとする、そのプロセスは、まさに地獄におけるサタンが神への復讐のために地球を目指し、そこの楽園に住まう無垢のアダムとイヴを堕落させ、楽園を追放したことの反復とも解釈できる。眠りから世界を目覚めさせるとは、罪の意識に目覚めさせるという意味であるとも解釈されよう。

尚筆者が参考にしたCDは、Hector Berlioz, *La Damnation de Faust,* op.24（Boston Symphony Orchestra conducted by Seiji Ozawa（recorded 1973, Deutsche Grammophon））である。ファウストはスチュアート・バロウズ（Stuart Burrows）（テノール）が、メフィストフェレスはドナルド・マッキンタイヤー（Donald McIntyre）（バス）が、マルガリーテはエディット・マティス（Edith Mathis）がそれぞれ歌っている。

2

第二「地上の音楽」

連作ソネットの第二「地上の音楽」は、純粋に人間の精神と肉体のそれぞれが、崇高なるもの官能的なるものの両方に感応して鳴り響く、共鳴する様を肯定的に歌った、地上讃歌といってよいのではないだろうか。それはマルガリーテとの愛の成就を媒体として成就する。そのときにこれまで何を見ても聴いても感動をせずに「倦怠」に捕らえられていて、毒杯を仰いで命を絶とうとする寸前に復活祭の音楽でそれを回避して、信仰心の回復を始めたファウストが、マルガリーテと出会うことでお互いに心を通わせることで、「倦怠」から抜け出したファウストは、「神」への信仰の回復のみならず、神の創造したもう「自然」の麗しさと崇高さに対しても、積極的にそれに自らを同調させていくようになる。

ただし、マルガリーテへの愛には、崇高さのみならず、肉体的快楽も含まれており、このあたりが、このソネットで言うところの「賤しき絃の音」（古城）に感応する「肉の翼で低く飛ぶ魂」ということになり、それが「『死』の波打てる心臓の響き」（古城）を予兆させるものであることも、作者によって示唆されてはいる。

尚筆者が参照したDVDは、Gounod, *Faust, opera in 3 acts 8 scenes—complete*

（The NHK symphony Orchestra conducted by Paul Ethuin（Live Recording: Sept.9 & 12, 1973 at NHK Hall, Tokyo））である。伝説のイタリア・オペラ・ライヴ・シリーズとして、NHKがイタリアから名歌手を招いて上演した、画期的な作品であり、「オペラが燃えていた栄光の時代の記憶」であるとDVDケースには記載されている。ファウストはアルフレード・クラウス（Alfredo Kraus）で、メフィストフェレスはニコライ・ギャウロフ（Nicolai Ghiaurov）が、マルガリーテはレナータ・スコット（Renata Scotto）がそれぞれすばらしい歌声を聴かせてくれる。これに日本からは合唱は日本プロ合唱団連盟が、バレエは谷桃子バレエ団と東京シティ・バレエ団が加わっているが、特に第３幕第４場のバレエ音楽「ワルプルギスの夜」の場面の踊りは圧倒的な迫力を持って迫ってくる名演技と言わねばなるまい。この時の演奏と演技は日本にとどまらず、世界を驚かせる名演奏と演技であったとDVDの解説者武石英夫（元NHKチーフ・ディレクター）は述べている。尤、欲を言わせてもらうと、マルガリーテ役のレナータ・スコットは、見事なソプラノの持ち主であるが、何しろ乙女のマルガリーテを演じるには、歳が行き過ぎているし、体形に貫禄がありすぎる点に難がある。

3

第三　「天堂の音楽」

筆者が参照したCDのカバーの日本語の説明によると、ゲーテの『ファウスト』は、多くの芸術家に影響を与え、多くの作曲家が曲を付けたが、「中でも『神秘の合唱』はマーラーの第８番の第２部とリストの『ファウスト交響曲』でご存知の方も多いでしょう。このシューマンの作品はゲーテの物語から『死と変容』というテーマを読み取ったもので彼の最高傑作のひとつと言われています。早いペースで曲を書き上げる彼にしては、構想から完成まで９年間の長い年月をかけ、じっくりと曲想を練っています。最初に書かれたのは神秘の合唱の部分から、まずクライマックスを仕上げてから、物語を遡るように音楽を書き進め、1853年に序曲が書かれて、雄大なる物語が完成しました。1856年にその生涯を閉じたシューマンですが、最後の３年間は創作することが不可能だったため、この年が実質的に彼の最後の『生きている証』になったのです」とある。

古城栗原元吉は同『明星』での紹介で、「第三章の曲、亦其範圍の濶大に於いて之（第一章のベルリオーズの曲）に劣らず、シユウマンが神曲の熱烈沈痛の情趣は、全編を通じて其澁滯斷續せるが如き章句中に其全貌を髣髴し得たりと稱す」と、或る批評家の評を用いて述べている。

さて、この第三のソネットの内容は、その名も「天堂の音楽」とあるように、これまでのベルリオーズのそれが「地獄の音楽」を中心としたものであり、グノーのそれが「地上の音楽」で快楽を主として扱ったものであるのに対して、ここでは人間の悲しみの涙でもって架けられた「虹の橋」という、『死』も『夜』も凌駕した愛の橋という天上的性質をその特徴としているといえよう。グレートヒエン（マルガリータ）の「永遠の愛」を媒体にして天上に「救済」されるファウストの姿が力強く示されている。

筆者が参照したCDは、Robert Schumann, *Scenes from Goethe's Faust, WoO3* (Warsaw Boys' Choir, Warsaw Philharmonic Choir and Orchestra conducted by Antoni Wit recorded at the Warsaw Philharmonic Concert Hall, Poland, 21-28 April, 2009（Naxos, 22011）である。ファウストはヤッコ・コルテカンガス（Jaakko Kortekangas)、グレートヒェンはクリスティーネ・リボー（Christiane Libo)、メフィストはアンドリュー・ガンゲスタッド（Andrew Gangestad）で、ゲーテの原作の言語ドイツ語の魅力を十二分に発揮して、見事な迫力ある作品に仕上がっている。特にファウストとグレートヒェン役の歌手の声は、心に沁みて、圧巻である。これをベルリオーズおよびグノーのフランス語ヴァージョンそれぞれの歌い手と引き比べて見るのも一興である。それぞれがその言語の持つ特徴を十二分に生かした、作品に仕上がっているということができる。

では具体的にシューマンがこの作品で描いて見せている内容をもう少し詳しく見てみよう。その解説者キース・アンダーソン（Keith　Anderson）が簡潔にそれを要約しているので、それを参照させていただく。

この曲の制作年代については、上述したのでここでは省略する。

＜内容であるが、三部からなるこの作品の第一部は、ゲーテの『ファウスト』第一部からは三場面が採られている。これらの場面はグレートヒェンの隣人のマルテの庭の場面で始まる。そこでは若返って知識と経験を探求しようとするファウスト

が、グレートヒェンに求愛するが、悪魔で誘惑者のメフィストに邪魔され、その場を立ち去ることになる。ここで採用されている言葉は、主としてマルテの庭の場面、つまりファウストとグレートヒェンの間にかわされる愛の場面からであり、これに続くのがマルテの東屋の短い場面である。第二の場面は町の城壁の壁龕に据えられている聖母ドロローサの像の前である。グレートヒェンはこの像の前に花を捧げ、ファウストの求愛に屈したことを後悔し跪く。第三の場面は寺院の中である。グレートヒェンの兄ヴァレンティンはファウストとのけんか騒ぎで殺されるが、妹を不道徳と非難して死んでいく。それでグレートヒェンはファウストの勧めで眠り薬と言われたものを母に与えて母の死を招いたが、悪魔の誘惑で絶望に貶められる。この時「ディエス・イレ」（死者のためのミサ曲）のコーラスが聴こえてくる。「哀れな私はその時なんと言えばいいのだろう」が繰り返され、グレートヒェンは気付け薬を求めて、気絶するが、コーラスは一段と急テンポとなって続く。

ゲーテの『ファウスト』第二部はその第一部とは異なり、五幕に分けられている。第一部は、ファウストがグレートヒェンを囚われの牢獄から救出しようとするのを彼女が拒み、嬰児殺しの罪で処刑されるのを待っていると、救済の声がする場面で終わっている。シューマンの設定の第二部は、一場面をゲーテ第一幕の「日の出」から採り、二つの場面を第五幕から採っている。心地よい景色の中にファウストは横たわるが、薄明りの中で疲れて眠ろうとしている。精霊の群れに囲まれたファウストに、アリエルがゲーテの長い歌から採った言葉で歌いかける。合唱が続くが、或るグループが別のグループを反復しながら、交唱する。アリエルは日が昇っても歌を続ける。ファウストは自然の美しさに蘇って、目覚める。第二場は「真夜中」であり、ゲーテの第五幕から採られている。ファウストとメフィストは浪費皇帝の金の問題を、紙幣を発行することで解決してやる。トロイのヘレンとのことなど色々あったのち、ファウストは皇帝の敵を敗北させたことで、自分の領地を拝領するが、海を埋め立てねばならない。すべてを我が物にするためには、フィレモンとボーシスという老夫婦を殺害し、その家を消失させてしまう。シューマンの選んだ場面には、四人の灰色の老婆が登場する。「欠乏」、「罪悪」、「不足」、「心配」である。彼女らはシェイクスピアの『マクベス』の魔女を思わせ

る。これら四人のうちの最後の者は鍵穴から宮殿に入りこむ。ファウストは「不足」(Not) という言葉が、「死」(Tod) と響きあうのをすでに聴いたが、今「心配」(Sorge) と対面し、彼女の言葉を拒絶する。そこで老婆は彼に息を吹きかけ、彼は目が見えなくなるが、光がまだ心の中に輝いている。彼は命じた仕事を鍬とスコップでするように人々に言う。シューマンの第二部の最終場面は、宮殿の外側の庭に設定されていて、松明に照らされている。ここにメフィストはレムレース、死者の悪霊、を少年の声で呼び出し、彼らに命じて墓を掘らせる。再び老人となったファウストは、彼らの仕事の音を聴き、彼の領地を干拓するために、部下が閘門や水路を作っていると勘違いして、手探りで宮殿を出てくる。この最高の時に感激するファウストは、しかし、レムレースの手に倒れこみ、悪霊どもは彼を地面に横たえる。今やこの灰色の髭の老人が砂の上に横たわるのを見たメフィストは、ファウストの尽きない探求にコメントして、「これですべてが完了だ」(Es ist vollbracht) と宣言する。

シューマンの作品の第三の主要部分は「ファウストの変貌」である。場面は渓谷、森、崖、荒野に設定されている。山の岩場に住んでいる聖なる隠者たちのその場所を描写する声がこだまする。ピーター・エクスタティカスが上下を漂いながら、テノールのソロで神聖な愛の恍惚に呼びかけ、これにバスのピーター・プロファンディスが続いて、深みから聖なる火に呼びかけて心に光をもたらすよう求める。ピーター・セラフィカスはバリトンのソロで、中空から少年聖歌隊を歓迎し、喜んで高く天掛っていく彼等を自らの精神に取り込む。天使たちはより高い天空を漂いながら、ファウストのなかの不滅のものをすべて運び、彼が救われたことを高らかに宣言する。若い天使たちは花を持ち、より成長した天使たちはファウストの遺体を運ぶ。若い天使たちは或る霊魂が近くにいるのを感じ、ファウストの不滅の遺体を、まるでそれが魂の繭であるかのように、受け取っている祝福された少年たちを見る。最高天の至高の領域では、ドクター・マリアヌスがバリトンのソロで、天の女王を讃美し、その女王に悔い改めた女性たちのコーラスが嘆願する。これにマグナ・ペッカトリックス（大罪人)、サマリアの女そしてエジプトのメアリーが加わり、さらにはこれにグレートヒェンという悔い改めの女が、聖女グロリオーサに助けられて、加わる。作品は最後のコーラスで終焉するが、これは二つの聖歌隊

とソリストのために用意したもので、それ用にシューマンは第二のヴァージョンを提供した。それは「儚いものすべてはただの模倣に過ぎない」（Alles Vergängliche ist nur ein Gleichnis）と、最後の行「永遠の女性が私たちを天に導く」（Das Ewig-Weibliche zieht uns hinan）である。

シューマンはこれらすべての彼の『ゲーテのファウストからの情景』の演奏を聴かないで死んだ。その第三部はドレスデンとライプツィッヒとワイマールで1849年のゲーテ百周年記念に演奏された。作品全体が最初に演奏されたのは、1862年ケルンであり、シューマンの死から6年後のことであった。＞

（May 7, 2016 作成）